

門田隆将氏著 「死の淵を見た男」の書評 に寄せた私の読後感

平成24年 大晦日 竹内哲夫 エネルギーの会会員・元東電

「エネルギー問題の会」の代表の金氏 顕氏からの依頼で一筆書きました。

私は東電OBすなわち身内であり、この事故で古巣は根底から崩壊し目下被災地元民の損害賠償で泥沼の窮地で、また新生東電としても復旧の道のりも遠く重い。

小職の人生回顧もこれがなければ恙無い平凡な余生送りだった筈だが、それもこのツナミの濁流でガレキ化した。発災当初は虚脱状態、衝撃、慙愧の発作で悩んだが、600日を経過し、いまではこの体験を甘受して地元復興を祈願する贖罪の意識を老骨余生の活性剤に変えています。弁明お断りはこれ位にして、大晦日、喪あけの大掃除気分で読後感を書きました。

0. 全体評 感想

「死の淵を見た男」という希有な題の本書はこの本は読み出すと耽読を誘う。この1年間に発表された各種事故調査報告書（東電、民間、国会）の何千ページにも及ぶ無機質の文体に辟易していた矢先、この本は実に生身のヒトの話、しかも登場関係者は全て実名で私の知己が沢山登場しつい夢中になった。

本当に死を覚悟の決死の行動も再々、この心拍の恐怖心にも自分も同化して心臓も鼓動する。仮想ドラマならまだしもこの地獄絵が、私の直近で現実起こった真実のドキュメンタリーだった、とまた気を取り直し われに返る。

場所は、一般人は通常でも入構許可が要る福I原発構内の孤立空間で、しかも大ツナミで破壊された災害被災構内の中で、また更に隔離された閉鎖空間の中操、緊対室が主。そこで主人公 吉田昌郎所長の檄のもと緊急事態に無我夢中で四苦八苦と活躍する現場マンの姿、・・・漆黒の全停電SBOの中での記録とり、果ては緊急弁のサル梯子での手動操作など、・・・また、話題は飛んで首都中心の総理官邸、東電本店、そこには権威と社会反応意識が優先するヒトがいる。

また、この相互間に指令と疑問解明の会話が飛び交う、そして認識・理解に齟齬、勘違いが起こる。福I対象の原子炉は4基、状況や危険度もそれぞれが日を追って変化するので、正しくドラマだ。ふと、これが現実だったのかとため息が出る。

長丁場の修羅場で男たちは敢然と戦った。ツナミ浸水、菅総理の来訪、ベント、海水注入、水素爆発・・・炉の危険状況も人の動きも目まぐるしくかわり、平和ボケの日本に突如訪れた昔の戦場並みの緊迫の日めくりドラマである。

しかも生の真骨頂の実話がずっしり詰め込まれている。

これは著者が、多くの現場関係者からの情報を高感度アンテナで精力的に收拾したファクトに基づき、所長などの主演者だけでなく銃後の守りの後方支援のPA女子の活躍に至るまで、誠にきめ細かく自然体のタッチで克明に表現したのは見事である。著者の情報収集と表現の筆致は誠に見事である。しかし私の推察では現場には、今回のこの取材に積極応援した協力者が沢山居た筈で、東電人しか知らない記述・表現が多々ある。これまで天下の大東電として、常に事故隠しの閉鎖性が批判的だったが、新生東電にむけの姿勢のオープン化も結構だと思う。

読後感に添えて私の関連のつぶやき ツイッター

I. 原子力の現場力

吉田昌郎所長を中心とした現場力（人間力）を主題のドキュメントで迫力がある。太っ腹の番長指揮官に現場マンは万籟の信頼を置き、筋書きない悲愴な戦いに昼夜兼行で当り事故拡大をこの程度でと止めたことに深く深謝したい。菅総理のインターラプトや本店指令に耳を貸さず、カタストロフィーを防止した。どだいマニュアルのない号機毎の出たところ勝負の現場合戦なので、沈着冷静な指揮官が不在なら結果はどうなったか判らない筈である。吉田の存在は東電にとって不幸中の幸いだった。

その中で、随所に描かれた職員の率先垂範、人情の話、a. 非番当直長がお家の一大事とはせ参じそのまま帰宅不能になった。b. 放射能被害を考えて高齢者義勇軍の編成。など胸を打つ話が多い。

とも角、未曾有の災害で、災害の拡大阻止のため献身的に当った主にラインの皆さんに心から深甚の敬意を表したい。事故原因は諸君とは別で、降りかかった災害の発生が先で、そこでの滅私奉公の経験は、将来人生の糧になるのに違いない。その点では、今回指令を受けて予想も訓練もない空中放水や消防車海水注入に当った自衛隊にも深謝したい。この災害の広い部門で大活躍した自衛隊は法のこだわりの認知問題を払拭して、そのひたむきな活躍を見て、永年の日陰者的存在を払拭して、親近感のある自衛隊サンに国民評価が上がった。

II 東電の組織

今でも元役員で謹慎の喪中気分でいる小職が、バッシングのサンドバッグ役の東電の内部事情、その自己批判的な論評も誠に自虐的で憚るが一言触れる。

東電の原子力部門は社内では永年の特別なエリート軍団である。また永年の不祥事・事件ごとに官の行政指導もあり組織も肥大の一途を辿って、他の現業部門と違い、安全や内部監査的なお役所型のメッシュ型で総じて本日はメタボになっている。本部制が敷かれ特別な執行権があるいわば幕府であり、私が辿った火力などは外様大名である。逆にシニカルに表現すると「国策推進の大本部」（昔の大本営気分が育つ土壤）の意識が時には暴走して問題を起こし官・民の間で摩擦を起して、不祥事扱いにされて、近年では国からは常時の要監視対象になり、国の保管理官が現場常駐している。この国（官）とタグマッチ形式で、保安院との協作でこの10年以上やって来て「失われた10年（実際は20年近い）」の原因でもあり、これにも今は改革のメスが入っている。

それに引き換え、今回の災害は未曾有を連発するほどの虚を衝かれる事件で、官邸・本店・現場間の戦場まがいのアドホックな連携体制には、平和な時代のマニュアル・既存の常識型の組織では役立たず、ヒト個人の能力次第になる。権威組織化で原子力の本部の中には現場向きでないお公家さまも育て、現場執行型でないため現場からは相手にされない点の情景描写は的確である。

逆に経営陣の中にも福I所長経験者（吉田の先輩）も多々いる。長丁場の陣頭指揮の末、吉田君の疲労困憊で倒れ掛かった姿は誠に痛々しいが、かようなことに備え、所長も直交代できる臨戦裏準備を所ごとに常に準備しておくべきだと思った。（実際はどうだったか本書で触れてないだけか？また魂・気迫までの吉田のレプリカ人間はいないので無理かもしれぬ。不明？）

III. イラ菅の登場

もしこれが最初からドラマなら配役に菅 元総理（愛称イラ菅）をキャストしたのは適役で大ヒット。彼の個性的行動は、この本の随所で描写を盛り上げて呉れた。しかし冗談抜きに、今回の年末総選挙で、「脱原発」だけを語る、いまや過去のヒトだが、背中を丸め脂の抜けた愛称イラ菅さんが、事もあろうが日本沈没が掛かる今回のこの修羅場で原発事故の采配の執行者に突如登壇して指揮を取った事自体は国家の危機管理上の大きな反省事項である。

この点は、日本の代表的指導者で、私も尊敬する佐々淳行氏が発刊の著「危機管理・記者会見」のノウハウ（文春文庫）で今回の不備ぶりを問題を詳述しており、この機に是非ご覧下さい。

佐々氏はいう。千年に一回の大災害と百年に一回の珍奇な政権が重なった。これも国家の危機管理の一部である。東日本災害自体が千年に一度の大災害で国家緊急事態宣言を日本全体のツナミ災害に対して発令すべきで、菅さん〔当

時 総理] は併発した原子力災害に特化して自らの目立ち行動で過剰介入し、ややパフォーマンスとし、原子力専門屋と自称し権力を使った。まさにドラマ演出になり、総理指令の空中からの放水などは昔の安保闘争の時、自分が受けた警察の使う手法の逆利用だと既に指摘されている。

IV. 結びに

21 世紀末には核エネルギーを安心して使いこなし、核戦略に防衛能力のある国しか存続しないと今も小職は確信している。原子カムラと言われても一向構わないが、今回の年末選挙で騒がれた一斉の「脱原発」コールに見るとおり、国民の原子力の受容性や国の危機管理はまだノホホンとしている。ホルムス閉鎖でもあれば、原発一斉再稼動か？まことに昔から他力本願の国である。

この書の主題は、東電の「現場力」であり、激甚災害に挺身自分をなげうった滅私奉公の実直な現場マンの必死な活躍であり、それを発揮させた快男児吉田昌郎所長の物語でもある。

しかしこの事故で東電の経営は壊滅し、その再生の道のりは誠に険しくまだ遠い。そして同時にいま東電は起死回生の再生路線で鋭意努力中だが、先行きの賠償負担、廃炉負担が読めず誠に厳しい状態にある。

今回のこの本書で読み取って欲しいのは、東電が培った伝統の「現場力」であり、この事故（停電）拡大阻止には身をなげうつDNAは、会社の再編など、安易で軽率な組織改編では決して生まれて来ないし、逆に枯死してしまう。魂を売ってはならぬし、また魂を作る i P S 細胞技術はまだ難しい。

新生東電に向け、特に原子力部門に特化した重装備の規制や管理体制を、国の新政権と原子力規制庁も入れ替わったこの機に原子力部門のシキイをなくし改革、脱皮をして欲しい。福 I の債務（地元賠償と長期化する廃炉処理）は東電の全体責任で全社挙げて取り組まねばならない。（了）

著者 門田隆将氏は日航機墜落事故、スポーツアスリート、太平洋戦争の秘話など幅広いジャンル（政治、経済、歴史、スポーツ）を手がけ山本七平賞受賞の今精力的に活躍中（昭和33生）のライター。

小職 竹内哲夫 は 東電OB（昭和31年入社 昭和8年生）で入社時期が原子力発電事始め期で、今主流の軽水炉以前に、原発初号として目下、廃炉解体中の東海1号ガス炉で核設計を担務、その後35年間は主に火力（現場は10年間）で、1995年から役員として火力・原子力・安全を担務、その後日本原燃社長、原子力委員。SNW・EEE会員

死の淵を見た男 吉田昌郎と福島第一原発の五〇〇日 門田隆将著 (PHP研究所・1785円)



平成23年3月11日、マグニチュード9.0の大地震によって引き起こされた大津波が福島第一原発を襲った。地震によって原子炉は自動的に停止したが、10分を超える津波が原子炉をのみ込み、あらゆる電源が喪失してしまった。

この結果、冷却機能が失われ、原子炉は暴走を始める。炉心を冷やし続けなければ、やがて炉心溶融を起こして大爆発、放射能が飛散し、東京をふくむ半径250キロ圏は人が住めなくなり、5千万人を超す人々が避難せざるを得なくなる。日本は分断され、日本としての存在を失う恐れがあった。それを食い止めるため

原子炉との壮絶な闘い

評・大野敏明

〔編集委員〕

には、なんと少しでも炉心に水を注入して冷やし続けなければならぬ。

本書は、命の危険を顧みず、暴走する原子炉と闘った男たちのドラマである。サブタイトルの吉田昌郎は東電福島第一原発の当時の所長。

電源が失われたため、自前の消防車で津波の痕跡である「池」の海水を吸い上げて放水を続ける。完全装備を着け、限られた時間で任務をこなさなくてはならない。所長は決断する。放射能を浴びる以上、若い者を退避させ、年配の者で任務を遂行しよう。

だが、いったんは退避した者たちが再びもどってきて注水を続ける。さらには、協力会社のメンバー、自衛隊、消防隊も駆けつける。足を引っ張る官邸、現

場を理解しない東電本社。彼らは放射能を浴びながらも、これでもかこれでもかと注水を行い、炉心の冷却化を続け、危機一髪のところ、炉心の冷却化に成功する。

だが、と著者は言う。「現場で奮闘した多くの人々の闘いに敬意を表するとともに」「これを防ぎ得なかった日本の政治家、官庁、東京電力：等々の原子力エネルギーを管理・推進する人々の『慢心』に思いを致さざるを得ない」と。

原発の事故は災害だけではない。テロも大きな脅威だ。

しかし、この国はまだまだテロに対する備えをしていない。アメリカでは9・11以降、原発の全電源喪失時のマニュアルが作成され、日本にも伝えられた。にもかかわらず、顧みられることはなかった。政治の恐ろしいまでの危機管理のなさが、大きな事故と大量の被災者を生むのである。